

縮小社会研究会 連続座談会第 3 回



日時：2026 年 7 月 24 日(金)19:30～

場所：オンライン <https://us02web.zoom.us/j/88020053519>

恒久欠乏経済の始まりについて考える～食料を中心に

話題提供 長谷川浩氏（当会理事、母なる地球を守ろう研究所理事長）

思想家で東京大学の斎藤幸平氏は新著「人新世の黙示録」において、あらゆるモノが稀少化、囲い込みにあい、恒久欠乏経済が始まるとした。そうしたらアメリカとイスラエルによるイラン攻撃（イラン戦争）が始まった。中東に原油やナフサを依存した東南アジア、南アジア諸国ではさっそく石油ショックが始まった。中東依存度の低い EU でもガソリン価格が日本の倍以上となった。日本ではナフサ由来製品の不足は起きているものの、政府の補助金と石油備蓄のおかげでガソリン価格高騰は海外ほどではない。しかし、輸入食料、飼料、肥料、石油製品、都市ガス、電気、日用品は今後値上げが必至だ。円安を政府が容認する状況では、輸入品の値上げも止まらない。物価高は庶民を直撃する一方で税収は増えて政府は潤う。

エルニーニョが始まった。この冬にかけて観測史上最強（最悪）のエルニーニョになることが危惧されている。もし最強となれば、今年冬から来年にかけて世界中の気候が 1 年半にわたって壊れて、雨の降るべき時に降らず、降らない地域で降ったり、ゲリラ豪雨が加速するなどこれまで経験したことのない極端気象が発生するだろう。そして来年 2027 年は観測史上最も暑い年となって、産業革命前から 1.7℃ 上昇と未知の領域に入ることが警告されている。日本では 40℃ 超えが頻発する可能性がある。農業は甚大な被害を受けるだろう。

日本から農家がどんどんいなくなっている。政府は大規模農家を増やす政策を推し進めているが、国土が起伏に富み平坦地が少ない日本では大規模化には大きな限界がある。耕作放棄地は害獣（シカ、クマ、イノシシ、サルなど）の巣窟になってしまう。2025 年の漢字が「熊」になったのも当然なのだ。そして、農業資材高騰、激甚気象災害は農家減少を加速する。

イラン戦争はたくさんある戦争の 1 つではなく、「平時」から「非常時」と新たな時代の始まりを告げるものだ。それが「恒久欠乏経済」だ。輸入の食料の値上がりは徐々に進んでいるし、今後は輸入食品の安い時代は終わる。日本の食料自給率はカロリーベースで 38% と先進国最低レベルであり、輸入のために年間 10 兆円近い外貨が流出しているが、外貨流出はさらに増大する。国内も、止まらない農家減少、極端気象の激甚化、獣害激化と食料の高騰どころか供給困難が来年 2027 年に起こっても不思議でない。

発表者は、ちょうど有料のオンラインコース「あなたの安全保障（食料、水、国土保全）を始めたところである。コースでは、「恒久欠乏経済」におけるサバイバルのための「あなたの安全保障（食料、水、国土保全）」の自助、共助、公助についてお話しする。コースの紹介も兼ねる。

参加登録：非会員の方は事務局（下記）までお知らせ願います。参加費は無料です。